

# 富山 如大地

— 第152号 —

発行人  
北島 昭彦

発行所 富山市総曲輪2丁目8-29  
真宗大谷派富山教務所  
編集 富山教区如大地編集委員会

電話 076-421-9770 FAX 076-421-9799  
教区・別院ホームページ [富山東別院](#)    
教務所アドレス toyama@higashihonganji.or.jp



勤行



御伝鈔拜読

## 富山別院 報恩講

### もくじ

・富山別院報恩講法話 寺本 温氏	2~17
・如大地編集委員の座談会	18~19
・研修会報告	20~22
・富山教区お待ち受け大会	23~24
・お寺紹介	25
・書籍紹介	26
・教区だより	26~28

✽✽✽ 真宗同朋会運動 ✽✽✽  
真宗大谷派という私たちの教団は、真宗同朋会運動の運動体であると思う。その宗門の一員として、どんな教法を宣布し、どんな儀式を執行して本廟護持、法義相続を体現してきただろうか、と自問する。

現在、人口減少、少子高齢化の中で、教団は教区改編を進め、その一環として二〇二三年度より高岡教区と富山教区も一つになる。

次は、組、寺院の改編となるのだろうか。新しい法友との出会いも生まれるだろう。

だがその前に、私のお預かりしているお寺が存在しているだろうか、と危惧する。

真宗大谷派のいのは、「全国の学習会」と言われた先輩がいた。

本山の御遠忌等が続いて、儀式偏重に傾いた感がある。儀式も伝統という大切な一面もあるが、まだ非常に封建的な体質と制度を含んではないか。

ご門徒は、重々しい儀式を求めているのだろうか。「お寺さんが一番勉強していない」と、ご門徒から指摘されて久しい。

「御同朋・御同行」の教えを具現化する儀式の構築と学びの場の創設が僧分としての一番の勤めと思う。

第十三組 正覺寺 小塚 弘道

【富山教区教化テーマ】

「なむあみだぶつ」を訪ねませんか？

富山別院 報恩講法話

【二〇二二年十月六日から八日】

「念仏の利益」

九州教区 長崎組 真蓮寺 住職 寺本温氏

この法話録は、二〇二二年十月六日(木)から八日(土)、富山別院の報恩講において、寺本温氏が「念仏の利益」の講題のもとお話された内容に加筆・修正をいただいたものです。

初速夜

十月六日

私は、長崎県西海市の真蓮寺の住職をしています。最近、大分県の四日市別院の輪番を拝命いたしました。その前は、約十七年間教育委員をしておりました。

富山別院では今日から報恩講が勤まります。今回、「念仏の利益」ということを講題とさせていただきますが、まずは報恩講ということに

ついてお話をさせていただきます。

報恩講の「報」はむくいるという字です。「応えていく」という意味で、報道関係の報から「知らせる」という意味もあります。「恩」というのは、親鸞聖人がみずからお念仏の教えをいただき、それを語り伝えてくださったお陰で、私がお念仏の教えに出遇えたことに感謝するということです。「講」というのは人々の集まりということですが、

私たちは、日頃の生活に追われて「恩」とい

うことを忘れてしまうことがあります。それを忘れないように、おもさやかたちであらわすため普段と違う荘厳をし、お念仏の教えを聞いていく方々とともに『正信偈』の節を変えてお勤めをしていくのが、報恩講ということですが、

自力―わがみをたのみ わがごころをたのみ―

『仏説無量寿経』の中に

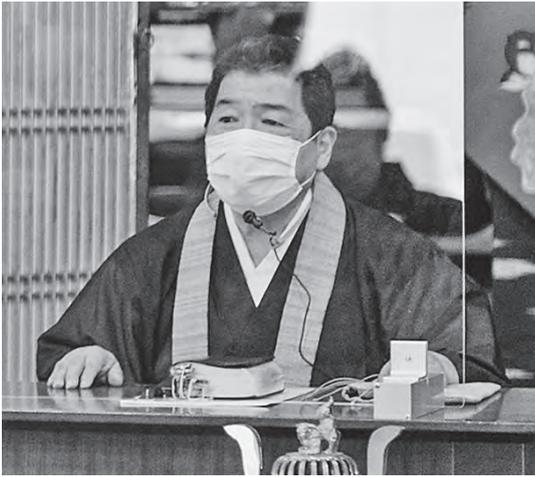
「然世人薄俗 共諍不急之事」

然るに世人、薄俗にして共に不急の事を諍う。

(真宗聖典 五八頁)

とあります。急がなくていいことを諍うように生きていませんか、とお釈迦さまから私たちに問いかけてくださっています。

では、不急でないことは何か、それは「利益」ということに繋がります。自分に生まれてきてよかった、幸せになりたいということです。ただ、私たちの心に任せられても、何が本当の幸せなのかよく分かりません。親鸞聖人は、



寺本 温氏

1956(昭和31)年、長崎県生まれ。  
九州教区 長崎組 真蓮寺住職、四日市別院輪番

自力というのは、わがみをたのみ、わがこころをたのみ、わがちからをあげみ、わがさまさまの善根ぜんこんをたのみひととなり。

(『一念多念文意』真宗聖典 五四一頁)

とおっしゃっておられます。自力とは自分をあてにして生きるということです。これは別に聖道門に限らず、人間に生まれてきたら皆そう生きてしまうのです。自分があてにしていることは間違いないと考えます。

つまり、都合が悪いことを遠ざけ、都合がい

いことだけを手に入れようとするのですが、一つ見落としがあります。欲が深いということですね。私たちは、手に入れても、入れても満足できないのです。そのような生きさまをお釈迦さまは餓鬼道がきどうと教えてくださっています。私たちがお念仏の教えをいただくというのは、何か都合がよくなるということではありません。自分の人生をいだけないものになっているのは何か、ということをお教えるのがお念仏の教えです。

お念仏の教え—偽物から本物へ—

煩惱は臨終の一念を迎えるまで付き合っていかなばなりません。だから、お念仏の教えに出会うまでは本物の幸せだと疑わずに生きてしまうということですね。そうすると、思いどおりにならないという愚痴ばかりが出る人生になってしまうのです。

もう一つ、自分だけを頼りにして生きる時、自分が本当に頼りになれば何も問題はないのですが、私たちの深い迷いというものは、頼りに

なると思い込んでいるということです。自分自身が頼りにならないと思うようになったら、真つ暗闇のどん詰まりです。

安心して自分の起こす心は頼りにならないのだと、本当に頼りになるものに出会い続けている人生が「念仏の利益」をいただく人生となるのです。しかし、お念仏の教えに出遇うことがない時や、お念仏の教えを忘れて生活している時は「わがみをたのみ、わがこころをたのみ」となるのです。自分だけが頼りになると思っているのです。だから、そういう生き方をしていると、誰とも出遇うことができない人生になってしまう、自分自身とも出遇うことがない人生になってしまうのです。自分が正しいものとして他者につつかり合う出遇いのない人生にしてしまい、「偽物の幸せ」を本物だと勘違いし、そう思い込んで生きているから自分の人生を本当の意味でいただけなくなってしまうのです。だから、少しも思うようにならず、「なぜ、私だけが」と愚痴ばかりの人生で終わってしまうのです。

## 他力をたのむ

親鸞聖人は、

他力と言うは、如来の本願力なり。

『教行信証（行）』（真宗聖典 一九三頁）

とおっしゃっておられます。如来、仏さまからはたらきかけていただく本来の願いを他力とあらわされました。つまり、仏さまに私という偽物を偽物だと見破ってもらわなければ、私たちは偽物を疑うことなく本物だと思い込み、偽物を人生の依りどころとして、「わがみをたのみ、わがこころをたのみ」ということで生きてしまうということなのです。そのことを端的に表している言葉が、「浄土」です。

「浄土」とは何かと言ったら仏国土です。この国土というのは「世界」ということです。仏さまの世界は私たち衆生や人間にとってはどんな意味や願いがあるのかと言えば「浄土」だということなのです。「清浄国土」という言葉を略してい

ます。清らかな仏さまの世界です。清らかであるとは、一点の濁りも見抜き、明らかにしてくださる仏さまの世界が「浄土」ということです。だから、清らかな世界のはたらきに出遇っている時に、「ああ、本当に自分が濁っていました」ということに頷けるのです。浄土とか仏さまのはたらきというものに出遇わなかったら、偽物を依りどころにして生きる私たちですから、こうした聴聞というかたちでわがみを言い当てられるご縁を得、それを確認しながら人生を歩ませていただくというのが真宗門徒の生活でありましょう。

## 善人なおもて

わがみは都合の善し悪しや分別ばかりですが、仏さまに見抜かれると、自分の都合の善し悪しが自分の人生をいだけなくしているのだと気付かせていただけるのです。言葉にすると簡単ですが、仏法に出遇わなければ気付きもしない世界です。都合の善し悪しを振り回している自分が自分を苦しめている。自分が自分の人生を

いだけなくしているのです。本当にありがたいです。気付きもしないことです。

ですから、仏法に出遇うことがない、あるいは仏法を忘れて生きている時は、都合の悪いことは全部他者のせいにしてしまうのです。自分は正しく、時代、社会、政治、経済、教育、親戚、近所、友だち、家族、全てが悪いからこんな思いをするのだと考えてしまうのです。都合が悪いことは全部他者のせいにして、都合のよさそうなことは、少しでも自分の手柄のように言ってしまうのが私たちです。そういうものを私たちは抱えているのです。

ですから、自力で生きる時は善人なのです。自力の善人です。ここでいう善人は、『歎異抄』の第三章（真宗聖典 六三八頁）に出てくる善人、悪人であり、周りが褒めてくれる善人ではありません。自分で自分を善き者と思つて生きている善人です。つまり、自分を頼りにして、「わがみをたのみ、わがこころをたのみ」という自力は、自分を善き者として疑わないのです。だから、自分が濁っていると偽物だということは全く出てこないのです。

『歎異抄』の第三章は、「善人なおもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」という言葉で始まります。「往生」という言葉は賛否両論ありますが、今は仏道に立つと言っておきましょう。善人が仏道に立って人生を歩んでいけるのならば、悪人こそ仏道に立って人生を歩んでいけるのですという親鸞聖人の言葉です。先ほどお話ししましたとおり、ここでは俗に言う善い人と悪い人という意味ではありません。ここで言われる善人とは自分を善き者だと疑わない生き方です。つまり、自分の尺度こそ間違いないという生き方です。仏法は聴聞すれば意味が分かるし、言いたいことは大体分かりますが、そこに私にとって本当にかけてあげられない、偽物を偽物だと言いついてあるがたいということは起きてこないのです。

ある所でそういうお話をしたら、話が終わってから一人の女性が手を挙げて「今日は善人、悪人のことを聞かせていただいてありがとうございますございました。ところで、どうしたら悪人になれるのですか」と聞かれました。私は心の中でそういう根性が善人なのだと思います。つまり

悪人こそ仏道に立ちやすいと言ったら、悪人になつたら仏道を歩めるのだと思ってしまうのです。そうではなく善人の悲しみを知らず悪人ということでしょう。自分を信じ、我を善しとする生き方は本当に悲しいことです。周りの人とも出遇えないし、自分の人生にも出遇えないという、その悲しみや痛みを知っている者が悪人ということでは。知っていると分か仏さまに知らされて、他力、如来の本願力のはたらきによって知らされた者が悪人ということでしょう。だから善人は本当に仏道に立ち難いのです。

### 本願力に出遇う確かなもの

そこで要<sup>かなめ</sup>となってくるのは「信心」ということです。親鸞聖人は言葉の右側には読み仮名を書きますが、左側には意味を書かれます。左<sup>ひだり</sup>仮名とか左訓と言いますが、「信」に「まこと」とふつておられます。まことのことに出遇って領かされる心を信心と言います。つまり、仏法に出遇って領けるかどうかということが非常に大切なことです。

本願の中の三十三願に『觸光柔軟の願』という願があります。字の如く、光に触れた者は柔らかなる心を賜るということです。光というのは、本願力のはたらきを光に喩<sup>たと</sup>えているわけです。私たちは闇の中をさがしています。それを闇の中であると知らせ、闇を破つてくださるのが本願のはたらきです。そういうものに出遇った者は柔らかなる心になります。信心の中身は柔らかなる心になることだということです。なぜ柔らかなる心かと言えば、自分の起こす心はあてにならないということに領きが起るからです。たいがいは自分の心にしがみついて、かたくなに我こそ正しい、自分は正しいと生きてしまうわけでしょう。そんな私の根性の上に、「ああ偽物でした」という領きが起るといふのは本当に柔らかいと思います。だから自力の善人というのは、自分は善き者だということをかたくなに信じる姿なのです。しかし、仏法に出遇うとそのことに領きが起ってきます。その領きが起こった姿を親鸞聖人は「愚禿<sup>ぐとく</sup>」と名告られました。そして、

故法然聖人は「浄土宗のひとは愚者になりて往生す」と候いしことをたしかにうけたまわり候いし。

『末燈鈔』（『真宗聖典』六〇三頁）

と、今は亡き法然聖人が「浄土の教えに生きる人は愚者になつて往生するのです」と親鸞聖人はお聞きになられた。愚者になることの大切さを伝えようとされました。「愚か」ということは、自分を立てる必要がない世界を賜わったということです。だから、「愚かなるが故にどうかお教えください、どうかお聞かせください」という世界を生きていくということです。

やはり人生においては、我こそ賢い、我こそ善人という世界の狭さと暗さを、あらためて教えていただくことができるのです。その喜びを現代に生きる私たちのところまで伝えてくださったお陰で本当の意味で人生をいただけるのです。そういうご縁に賜ったご恩をあらためて知らせてもらうのです。それが、報恩講をお勤めし、人生を確かめ、歩ませていただくことになろうかと思えます。

## （初晨朝法話）

十月七日

昨日、富山別院において『御伝鈔』上巻が拝読されました。その下巻に「山伏弁円やまぶしべんねんさいど濟度」とよばれる一段があります。講題に掲げさせていただいた「念仏の利益」、つまり念仏の救いとは何かということをも具体的な事例として挙げておられるかと思えます。

### 弁円べんねんの改悔

ご存知のように念仏が禁止されて、法然上人は土佐の国、親鸞聖人は越後の国に流罪になりました。お二人は、その日、その日を一生懸命に生きておられる方々とともに生活しながらお念仏の教えを説かれます。法然上人は五年で四国から京都に戻りましたが、まもなく亡くなられます。親鸞聖人はその情報をお手紙か伝言で知られたのでしょうか。本来であれば、一刻も早く越後から京都に戻って師である法然上人にお会いしたかったでしょうが、それはもう叶

いませんでした。それならば一緒にお念仏の教えをいただいで人々と生活をしようと越後に留まられたと『御伝鈔』（真宗聖典 七三三頁）に出ています。

その後、親鸞聖人は、冬の越後の生活が大変なので関東に移り住もうとされた人たちと一緒に出られたのだと思います。そして、弁円が住む板敷山いたぢきやまの近所、稲田いなだというところにお住まいになりお念仏の教えを説かれるのです。

弁円が行っていた祈祷というのは、護摩ごまを焚くことによつて都合が悪いことを遠ざけ、都合のよいことだけを届けるというものです。つまり人間の思いを叶えていくことがあるのでしょうか。そのような地で親鸞聖人はお念仏の教えを説かれ始めます。お念仏の教えというのは「念仏の利益」に関係してきますが、善し悪しを超えて「今」をいただくということがあります。昨日も申しましたが、私たち人間に生まれさせていただいて仏法に出遇わない人生、または仏法を忘れて生きる時は、自分の都合の善し悪しを満たしていくことが幸せに繋がると疑われないということがあります。しかし仏法とい

うものは、その都合の善し悪しに振り回されて苦しんで迷っているのだと教えてくださるものです。どんな人生もいただいていけるといことがそこにあります。人間の心に任せれば都合がよい人生が幸せで、都合が悪い人生は不幸だと言ってしまうますが、どんな人生も尊いのです。

お釈迦さまのところに戻りますと、

「吾當於世、爲無上尊」

吾當に世において無上尊となるべし。

『仏説無量壽經』（真宗聖典 二頁）

と、おっしゃっておられます。生まれてすぐに天と地を指さして、「天上天下唯我独尊（天の上にも天の下にも唯我独りにして尊し）」と宣言されたと伝えられています。

私たちの善し悪しというものはすぐに他と比べるわけです。自分より劣っている人を見ては優越感を感じ、自分より能力のある人の前では萎縮してしまいます。他と比べて幸せか不幸せかを気にしています。けれど、「唯我独りにし

て」ということは、他と比べる必要のない人生

を賜ったのだということをお教えくださっています。善し悪しを超えて今をいただく、どのような人生も現実もいただいていけるとい利益がそこにあります。ですから、親鸞聖人が説かれるお念仏の教えに出遇った人々は、善し悪しを超えて現実をいただいていくという人となっていくのです。それで、誰も祈禱を頼まなくなります。そこで弁円は、「親鸞が怪しげな教えを説くから、自分のところに誰も祈禱を頼みに来なくなった。一度厳しく追及してやらなければいけない」と思って、山で待ち伏せをしますが、親鸞聖人は里の方の道を通られます。今度は里で待ち伏せをすると、今度は山の道を通られま

す。なかなか会えないので刀や弓で武装して親鸞聖人の元へ訪ねていきます。その時の様子を『御伝鈔』には、

聖人左右なく出会いたまいにけり。

『御伝鈔』（真宗聖典 七三三頁）

と書かれています。

「左右なく」とは「何事もなかったように」と

いう意味です。親鸞聖人は、何事もなかったように弁円の前に出て来られました。その姿を見て弁円は驚きます。言うことを聞かなかったら武器で脅すか、下手したら斬りつけるかということも考えていたかもしれませんが。そんな自分の前に何事もなかったように「ようこそ、待っていましたよ」くらいのことがあったのでしよう。それで、弁円は驚いて、日頃考えていることをいろいろと親鸞聖人に語ったら話を聞いてくださったのです。そして弁円は、

たちどころに弓箭をきり、刀杖をすて、  
頭巾をとり、柿衣をあらためて、  
仏教に帰しつつ終に素懐をとげき。

『御伝鈔』（真宗聖典 七三三頁）



と、お念仏の教えに帰依され、「明法房」という法名をつけてもらいました。

阿弥陀のことを無碍光、「碍げなき光」と訳されます。つまり何も碍げにならないというのが弥陀の本願です。もう少し柔らかい言葉で言えば、誰も見捨てない、誰も漏らさないという願いを、阿弥陀の浄土としてお釈迦さまがお説きになられたのです。それを依りどころに生きておられる親鸞聖人と弁円の出会いは、やはり「左右なく出会いたまいにけり」です。善し悪しを超えて、自分に反発して武装して来る人とは会わないということのない世界があるのだと思います。

さらには、山伏の修験道しゆげんどうを一生懸命やってきた弁円に、それを簡単に捨てられるかということが疑問になります。弁円は武装してくるような人ですが、実は心の優しい人だったのではないかと思います。というのも、弁円が一生懸命祈禱をしていたのは、そこに住む民衆に幸せになつて欲しかったからだと思います。それを願った修験道しゆげんどうを歩んでいたのでしょう。しかし、どれだけ願いが叶つても十分だと言わない人々を

見て、弁円は、本当に祈禱でみんなが満足して幸せになれるのだろうかという問いをいつも抱えていたと思います。だから、善し悪しを超えて生きている聖人に会った時、ここにその世界があったと敏感に感じられたと思います。自分の祈禱こそが正しいという答えの中で生きてきたから、親鸞聖人を傷つける行為に走つたと思います。しかし、親鸞聖人の振る舞いや、自分の話を聞いてもらったことから弁円は回心えしんします。心が回り信心を賜ることです。それは、今まで依りどころにしていた自分の思いがひっくり返り、本当にあてになるものを依りどころとしていく心を賜つたということです。ですから、問いを持つていた弁円だからこそ、親鸞聖人の善し悪しを超えた生き方と出遇った時に、ここに道ありと回心が起こつたのです。

ある時、弁円（明法房）は、仲間と一緒に京都の親鸞聖人を訪ねようと旅立ちますが、途中で病気になるります。明教坊という僧侶が一人残つて看病をしていました。しかし、弁円は回復することなく亡くなられます。明教坊がそのことを親鸞聖人に伝えると、親鸞聖人は

明法御坊みやうぼうのおんぼうの往生のこと、おどろきもうすべきにはあらねども、かえすがえすうれしうそうろう。

『親鸞聖人御消息集』（真宗聖典、五六〇頁）とおっしゃいます。

私はそのお話をする時、一人の先生を思い出します。私の近所に武宮礼一先生たけみやれいいちという方がおられました。その方は、日本だけでなくブラジルの開教監督もされて世界中を飛び回つてお念仏の教えを説かれていた方です。

武宮先生は「地位や名誉や財を成しても、本当に自分の人生をいただくようなご縁が開けなければそれは空しい人生となってしまいます。地位や財、名誉がなくとも、その人生を尊いいただける人生はありがたい人生」と言われました。つまり、生きているうちにお念仏の教えに出遇つて、都合の善し悪しを超えた「今」をいただく人生を開くことができ本當にうれしいことだと、親鸞聖人が教えてくださっているのだと思います。

## 〔初日中法話〕

十月七日

お寺に生まれて―お念仏の教えをいただく―

私はお寺に生まれ育ちました。親や周りからも僧侶になれと言われ、お寺に生まれたら自分で自分の人生を自分で選べないのか、僧侶だけにはなりたくないと思うていました。

私の祖母ですが、ある時、私が幼稚園から帰って「ただいま」と玄関にカバンをポーンと投げた遊びに行こうとしたら、祖母が「ちょっと待ちなさい。今、本堂では報恩講が勤まっています。ご門徒さんが忙しい中参ってくださいているのに、寺に住むものがそこに座らんとはなにごとや」と無理やり座らされました。普段は優しいけど、お寺のことや聞法のことになると厳しいのです。そこで私が考えることが何かと例えば、あの先生の難しいお話、座っている人は分かるのだろうか、早く終わらないかなです。遊びに行きたいのです。その頃の私はお話をいっぱい聞いているから言葉はなんとなく分か

りましたが、自分のこととして聞いていません。仕方なく座っているだけです。

しかし、ご門徒の中に一人だけ私に僧侶になれと言わなかったおばあちゃんがありました。それとおばあちゃんは、明治生まれで家が貧しかったこともあって、尋常小学校四年生の時に子守奉公に出ました。まさに『おしん』です。その後結婚し、子どもを何人か授かったのですが、夫に早くに亡くなられてしまいます。そこで、子どもを抱えながら畑を開墾し野菜を作ります。その野菜を天秤棒で担いで公設市場で売ることを生業にして子どもたちを育てられました。忙しく経済的にも厳しい中を生きておられたのですが、お寺のお座だけは欠かさず参っておられたので、私のことを可愛いがってくださいました。晩年、末期癌が見つかり入院されました。お見舞いに行ったら全然暗くなく、あと余命数ヶ月と医者から宣告されたと言われるのです。「周りの人は、苦勞の連続で、しかも末期癌になって不幸な人生やなと言う人がいますが、私はちっともそんなこと思いません。この人生の他に私の人生はないですから。それがいただ

けるといことが、仏法に出遇わせていただいたおかげです」と。さらに私に「坊ちゃんもね、親鸞聖人のお念仏の教えをいただく人になってほしい」と言われるのです。

そのおばあちゃんも、自分がお念仏の教えをいただいて本当にありがたかったから、私にもお念仏の教え、つまり僧侶、住職でなくて念仏者になってほしいと唯一願いをかけてくださった方です。その生きざまのまま最後まで末期癌の中を生きていかれました。私は、そのおばあちゃんの生きざまにふれて、おばあちゃんみたいな人生を歩みたいなど、そこには、仏さまの教えに出遇うカギのようなものがあるのかもしれないと思っていました。

## 「念仏の利益」―私が知らされていく―

ある時、おばあちゃんの家にお参りに行くことになりました。まだ入院中だろうと思っていたおばあちゃんが家の前でお花に水をあげていました。「こんにちは」と言って振り返ったおばあちゃんの顔は、抗癌剤で髪の毛が一本もない

ツルツルの頭でした。一緒にお参りしてお茶をいただいた時に、「坊ちゃん、癌になってもありがたいということもあるんよ」と。「必ず亡くなっていく身であるというのは聞いて頷いているつもりでした。でも、よく考えたら目の前のことに振り回されて、忙しい、忙しいと生きてきました。それをお医者さんからあと数カ月と言われ、ああ本当に死ぬのだなということが領けた時、毎日、毎日を大切に生きていこうという生活が始まりました」と話されました。

雷に打たれたような衝撃がありました。「念仏の利益」、救いと言ってもいいですが、そういうところにあるのだなとつくづくいただきました。私はおばあちゃんとの出会いがあつて、きっとそこにどんな人生もいただくカギがあるのだなということに気付かせてもらいました。それから自分のこととしてお念仏の教えをいただくという事に気付かされ、聞法していく生き方が始まったのです。そのおばあちゃんにご縁をいただいて本当にありがたいと今になって言えるのです。

私は三年前に、自坊で門徒のみなさんに次の

ようにお話しました。「大腸癌が見つかって今度手術することになりました。お医者さんは自信があると言われるからたぶん成功するとは思いますが、それは分かりません。この法話が最後の法話になるかもしれないので、今日は居眠りしないで聞いてください」と言いましたら、みんな苦笑いしながら、さすがに一人も居眠りしないで聞いてくださいました。これが最後かもしれないと思つたら大事にするのです。普段は「まだある、まだある」と思つて生きているから、人生のたった「今」の大事さというものが見えなくなるのです。

夢の落とし穴には人間が持っている未来志向というものがあつます。何か未来によいものがあるように思うのです。でも、未来に期待するというのは、「今」がただけでないから未来に、ああなつてこうなつて喜ぼう、納得しよう、そういう心がはたらいているのです。人間はお念仏の教えに出遇えない時や、お念仏の教えを忘れて生きる時は、「今」をいただけないから未来に期待するのです。最後かもしれないと思つたらやっぱり本当に大事にしたいと思います。

そういう世界が開いてきます。まだある、まだあるという時にうかうかと生きてしまうわけでしょう。

新型コロナウイルスが流行りだした最初の頃、自分の家のトイレトペーパーが少なくなってきたので、近くのお店に行きました。しかし、十軒くらいお店を回つてもどこにも売っていません。空の棚に「トイレトペーパーが無くなるというのはデマですから買い占めたりしないようにしましょう」という紙が一枚プラン、プランと虚しく揺れていました。つまり、もう無いかもしれないと思つたら大事に使うと思うのですが、いくらでもあると思えば本当に無駄に使つてしまうのです。

それは、トイレトペーパーだけでなく人生もそうです。まだすぐには死ぬことはないだろうと思つたら、本当に急がなければいけないとは何かということを見失つて、目先のことに振り回されてしまいます。本当に急がないといけないことは、私が私に生まれ、私が私として生きていくことが本当に尊いことなのだ、本当の意味で生まれてきてよかったと言えるかどうか



かです。目先の思いが叶って「よかった、よかった」と言っても一生続かないでしょう。思いが叶った時はやったと言いますが、ちよつと経つたら次のああなつてこうなつてが出てきます。何も言うことがないどころか、すぐ次の言うことが出てくるのです。だからそういうところに本当の満足はありません。

自分の人生をいだけないものになっているのは何なのか、それは思いどおりを願うということです。思いどおりを願う時は、「今」が思いどおりと見えません。「今」が思いどおりになつてないから、過去を振り返つて、あの時ああいうことを言うべきではなかった、すべきでなかった、違う方を選べばよかったと言つてしまいません。身はたった「今」を生きているのに心は未来と過去を行つたり来たりしています。仏法には、そういう私たちを「今」に立たせてくださるといふご利益があります。

『仏説無量寿経』に「四十八願」といふ本願が説かれています。その十八番目の「念仏往生の願」にお念仏の教えに出遇つて、そのことに領き喜んで、お念仏の教えを依りどころに人生を

生きていく者を、誰も見捨てない、誰も漏らさないという意味のことが書いてあります。

親鸞聖人の時代にも、それを逆手にとつている造悪無碍ぞうあくむげの人がいました。つまり、悪いことをしても、誰も見捨てない、誰も漏らさない本願だから何をしてもいいと、悪いことばかりする人が出てきました。仏さまは悪いことをした人も見捨てはしません、わざわざしなくてもいいような悪いことを進んでする必要はあるのでしょうか。

『歎異抄』の第十三章に

さるべき業縁ごうえんのもよおせば、いかなるふるまいもすべし。

(真宗聖典 六三四頁)

と、悪いことをしないでおうと思つても、悪いことをしてしまうことがあると書かれています。現代を生きる私たちは、「分かるか分からぬか」「知っているか知らないか」が非常に重要だと考えています。分かつたら身に付いたと思うのです。道德の授業では、「人の悪口を言わな

い」「欲張らない」「腹を立てない」「困った人を助けましょう」とか知っているにもかかわらず、人の悪口を言いませんか。これが私たちの課題なのです。

『教行信証』に「慙愧」という言葉があります。が、本当に悪口がよくないと知っている人は、言ってしまった時に「ああ、恥ずかしいな」ということがあります。多くの自力の善人は言い訳をするのです。「私が言う悪口なんて可愛いものだ」「あの人はひどいことをしょっちゅう言っている。私はたまにしか言わないのに」と言って、私は悪くないと自分を立てようとしませす。これは悪口を言わないことが大切だと本当に知っていることではないからです。だから、造悪無碍の人は、仏さまのお心を見失って、自分の悪を正当化していこうという迷いがあるのです。

お釈迦さまは丁寧な方で、「念仏往生の願」だけを説いたら、そういう人が出てくるだろうとすでに見抜いておられました。だから「念仏往生の願」の後に、「修諸功德の願」別名「臨終現前の願」を説かれました。字のごとく、「諸々

の功德を修していきなさい。宗教的にも道徳的にもよいということを一生涯にして功德を積んでいきなさい。そうすれば臨終にあたってその人の前に阿弥陀仏と多くのお仲間が現れます」ということです。親鸞聖人は

臨終まつことなし、来迎たのむことなし。

『末燈鈔』（真宗聖典 六〇〇頁）

ということがお念仏の教えだと説かれます。「臨終現前の願」だけを見ると一生懸命功德を積んだ人にお迎えがあるとついつい読みがちですが、ありがたいことにその前に誰も見捨てない、誰も漏らさないという「念仏往生の願」が説かれていなのです。この二つの関係が何かというと、結果や成績を問わないということでしょう。やはり宗教的にも道徳的にもよいといわれることを一生懸命することは大切です。嘘、悪口は言わない、欲張らないということは大切です。

お念仏の教えに出遇わなければ、未来に何かよいことがありそうな気がして未来のために「今」を生きるというのが人間の一般的な考えで

しょう。結果や未来から解放されるということが、お念仏の大きな利益の一つとしてあるのではないだろうかと思えます。

人間の努力の大切さと、結果や成績を問わない世界の大切さと相まって説いてくださったお釈迦さまのありがたさをあらためていただくようなことでもあります。

## 結願晨朝法話

十月八日

### 自力の心が破られる信心

昨日もお話をしましたが、「念仏の利益」のことを申す時、簡単に言うと「回心」ということがあります。お念仏の教えでは「回心」というのは信心を賜るといいますが、具体的には、自分をあてにして疑いもしなかった人生を、他力という如来さまの本願力、本当の願いを依りどころとする生き方に心がひっくり返ることで、つまり、わがみ、わがこころを依りどころにしてきた者が、自力の心が破られ続けていく

ことが「念仏の利益」としてであろうかと思いません。

### お釈迦さまの弟子・物忘れのシュリハンドク

お釈迦さまの弟子の一人にシュリハンドクという方がおられました。シュリハンドクのお兄さんが先にお釈迦さまのお弟子になられました。弟であるシュリハンドクに「お釈迦さまの教えは大切だぞ、お前もお弟子にしてもらいなさい」というお兄さんの呼びかけによってお弟子になります。

シュリハンドクは物忘れ名人です。何でもかんでもすぐに忘れてしまいます。ある時シュリハンドクはお釈迦さまに、「私はお釈迦さまにお話をいただいてもすぐに忘れてしまいます。これ以上聞いても仕方ないなと思いますし、ましてや私のようにつまらない弟子がいては、お釈迦さまの教団に泥を塗ることになります。どうか破門にしてください」と申し出ます。お釈迦さまは大慈大悲の方ですから、破門するとはおっしゃいませんでした。そこでお釈迦さまは、シュ

リハンドクにほうきを一本渡して、「塵を払わん、垢を除かん」とこの二つの言葉を言いながら掃除をしなさいと言われました。



### シュリハンドクの気付き

しかし、物忘れ名人のシュリハンドクにとって、この言葉を覚えるのは大変だったと思います。仲間のお弟子さんたちの協力もあったことでしょう。「塵を払わん、垢を除かん」と毎日のように掃除をしていたら身につけてきました。シュリハンドクはこの二つの言葉をそらんじて掃除をしたら、何でお釈迦さまは、こんな言葉を言わせながら掃除をさせるのだらうという思いが起こってきます。初めは、いつだれが来ても気持ちよいように掃除をせよということ

なのかなと思っていました。ところがある時、目の前の塵や垢を払えということではなく、自分の心の中の塵や垢を払いなさいということをこのほうきで教えてくださったのだと気付いたのです。

シュリハンドクにとっての心の塵や垢は何だったのかと言うと、物覚えの悪い自分はずらなという見方だったのでしよう。お釈迦さまは物覚えの悪いシュリハンドクをつまらない存在とは見ていませんでした。他ならぬシュリハンドク自身が、自分は物覚えが悪いからつまらないものだと思っていたのです。

私たちはどこかでこうじゃないといけないという心を抱えています。それが自力という心です。親鸞聖人がずっと見つめてこられたのは自力の執心ということでしよう。親鸞聖人は「わがみをたのみ、わがころをたのむ自力に執着していく心」「どこまでいっても自分を立てて、自分にしがみつくといい煩惱の心」そういうわがみを、仏さまのお念仏の教えによって見つめながら歩まれたのです。



### 自力の執心の離れがたさ—私の根性—

『正信偈』の前半は、『仏説無量寿経』という本願が説かれているお経のお心です。後半は、インド・中国・日本の七人の僧侶、七高僧がお念仏を自分のところまで届けてくださったというお心です。前の方は、お経に依るところだから依経段、後の方はそれを解説してくださった七人の僧侶の段だから依釈段といえます。依経段の最後に「信樂受持甚以難 難中之難無過斯」と出てきます。信樂というの信心という

意味です。それをいただき保つというのは甚だ困難なことだということです。この難に過ぎたものはないということです。つまり自力の執心、自分をあてにしている生き方は本当に逃れがたい生き方なのだと教えてくださっています。時々、こんなことを言われる方がおられます。「真宗の教えは難しいです」と。これは間違いです。教えが難しいのではなく、自分の根性が難しいのです。法話などを聞いてそうだなと頷いていても生活の現場に出ると、そのとおりにならないわがみがあるのです。

### 結果や成績にとられる心からの解放

「念仏の利益」は、こういうものでなければならぬという結果や成績から解放されていくことです。シュリハンドクは物忘れしている自分自身がつまらないと思っていたことが迷いでした。簡単に言うと、自分を苦しめていたのは自分自身であったというのが、シュリハンドクの悟りです。シュリハンドクが自分自身の心の闇に気付いていった姿を見て、お釈迦さまはシュ

リハンドクが悟ったとおっしゃいました。悟りというのは、学問と修行によって開かれていくものだと言られる仏教もあります。しかし、私たちお念仏の教えをいただいでいくものにとつては、このシュリハンドクの悟りのように、自分を苦しめていたのは自分自身だったということに出遇うことが大切なのです。自力の私たちは、自分のものさしに合わないものは受け容れられないのです。

私たちの欲望や煩惱は恒久的なもので、満足ということを知りません。そのような自分自身への執着の心を破ってくださいなのが、「念仏の利益」ということなのです。お念仏を称えるというの、阿弥陀仏の呼びかけに応えるということです。それは、たとえどんな人生であっても呼びかけなのです。お念仏を申す時、また自分自身の物差しで、私をただけにない者になっていたなと気付かせてもらえることです。その呼びかけに何度でも気付かされながら人生を歩んでいくことが大切なことだと思います。

## 〔結願日中法話〕

十月八日

念仏によつて救われるとはどういうことなのか。智眼ちげんということがあります。

無明むみょう 長夜の燈炬とうこなり

智眼ちげんくらしとかなしむな

生死しやうじ大海だいかいの船筏せんぼつなり

罪障ざいしょうおもしろとなげかざれ

『正像末和讃』（真宗聖典 五〇三頁）

とご和讃にあります。人生を自分の思い、都合で生きるとそれは無明長夜、真つ暗闇になつてしまします。そういう中で念仏は燈炬だと、自分の人生は闇にありながら、ともしびとして念仏は自分の人生を照らしてくださいとあります。智眼は智慧の眼です。偽物を偽物だと見破つてくださる仏さまの智慧ですが、それを自分が持たないということに悲しむ必要はないのです。他力ということ。自分で偽物を偽物だと見破れないで悲しむ必要はありません。仏

さまの智慧に照らされて偽物を偽物だと見破ることが出来るからです。そこで真実の眼というなら真実とは何かということになるのですが、親鸞聖人は、

法身ほっしんは、いろもなし、かたちもましまさ

ず。しかれば、こころもおよばれず。こ

とばもたえたり。

『唯信鈔文意』（真宗聖典 五五四頁）

真実は色も形もないし思うこともできない、話すこともできないとおっしゃっております。つまり、偽物が偽物と知らされたところに真実がはたらいっているのです。私たちは、自分の都合のよいようになることが幸せだと思ひ込んでいます。「偽物の幸せ」を疑わないで「偽物の根性」をもって生きています。それを偽物だと教えてくださるものに出遇わせてもらうことによつて、具体的に真実を解明しなくても、偽物によつて生きているということに気付かせていただくことになります。

### 王舎城おうしゃじやうの悲劇 — 韋提希夫人いだいけの嘆き



智慧の眼は仏さまの眼です。『仏説観無量壽經』の中に「王舎城おうしゃじやうの悲劇」という物語が出てきます。その物語の概要は、マガタ国の阿闍世あじゃせという皇太子が、自分が王になるためのクーデターを起こすというものです。阿闍世は自分の父である頻婆娑羅王びんばしやらおうを牢獄に閉じ込めてしまします。そこに、韋提希いだいけという、王のお妃で阿闍世の母が、「息子に父殺しにさせてはならん、夫が殺されてはたまらん」と王が幽閉されている牢獄にそつと食べ物を運び、もう一度仲のよい家族に戻れるように賢くふるまっていました。その姿を善導は賢夫人と呼ばれています。しかし、韋提希の行動が息子に露呈します。息子は

劍を母に向けようとしますが、そこに大臣が入ってきて止めます。そこで息子はあきらめ、お城の一室に韋提希を監禁してしまいます。そうすると韋提希は賢夫人の姿ではありません。隣の家で夫婦喧嘩が始まると、大した理由でもないのにと冷静に見ることができませんが、我が家で夫婦喧嘩が起きたら悠長なことは言っておられません。冷静に物が見られなくなります。それと同様に韋提希も閉じ込められる前は賢くふるまっていました。いざ自分に火の粉がかかってくるのと泣いてしまいます。そこで韋提希はお釈迦さまに

「悲泣雨涙 遥向佛禮」

悲泣雨涙して、はるかに仏に向かいて礼したてまつる。

『仏説観無量寿經』（真宗聖典 九二頁）

と、「私はこんなに悲しいのです。今までも慰めてくださったようにお弟子を遣して、私を慰めてください」と懇願するのです。ここが大切な視点だと思います。

韋提希はお釈迦さまのことを、皆が困った時に都合のよい方法を教えてくださる方だと見ています。つまり仏法をいただくというよりも、知識や教養で困った時の杖ぐらいの気持ちで韋提希は聞法をしていました。だから、韋提希は牢獄に閉じ込められ、いよいよ困って、お釈迦さまにお弟子を遣わせてくださいと懇願するのです。しかし、お釈迦さまは、

「知韋提希 心之所念」

韋提希の心之所念を知ろしめして。

『仏説観無量寿經』（真宗聖典 九二頁）

と要の言葉をおっしゃられます。

「心之所念」とは、心の表面には出ていなくても心の奥深いところで念じている願いと言っていると思います。韋提希が、閉じ込められて泣きながら「どうかお釈迦さまお願いします」と言いました。韋提希は、息子が改心し、自分と夫の頻婆娑羅王が解放され元の仲のよい家族に戻ることができたらよいと、自分の都合のよいことばかりを考えていたのです。しかしお釈迦

さまは、韋提希に本当に自分の人生として仏法に出遇ってほしいという機会を日頃から待っておられました。韋提希は閉じ込められた時、あまり意識はしていませんが、人生とは何だろうか、という心がうごめきだしていたのです。韋提希はお妃の姿のままに閉じ込められていますから、アクセサリーなどの飾りを付けたまま、お金も持っています。お金を出したら、それに見合う品物やサービスが受けられます。しかし、一人閉じ込められてしまうと、どんなにお金を持っていても使うことができません。さらに、お妃という地位や名誉や権力を持っていても、閉じ込められるとお妃であろうがなかるうが関係ありません。閉じ込められるまでは、私たちが一般生活の中で幸せと言えるものをほとんど手に入れていましたが、閉じ込められた時に、それが何の意味も持たないという現実にあつてしまうのです。韋提希本人は自分の心の表面のことしかわからないので、泣いてどうかしてくれと懇願するのですが、お釈迦さまはそうではないと見てとられたのです。心の表では、解放されて仲のよい家族に戻りたいと願っ

たでしょうが、心の奥底、「心の所念」においてはそういう幸せでは間に合わないとお釈迦さまは見えてとられました。



もう一つ、去年若い人たちの間で「親ガチャ」という言葉が流行りました。ガチャというのは、お金を投入してガチャガチャと回すと、カプセルが出てくる子どもが好きな販売機のことです。カプセルが出てきて開けると、滅多に手に入らないものが入っていたら「レアもの」といって「アタリ」です。頻繁に出てくるようなものは「ハズレ」です。若者が「親ガチャ」と言い出した背景には、自分たちはこの世に生まれてくる

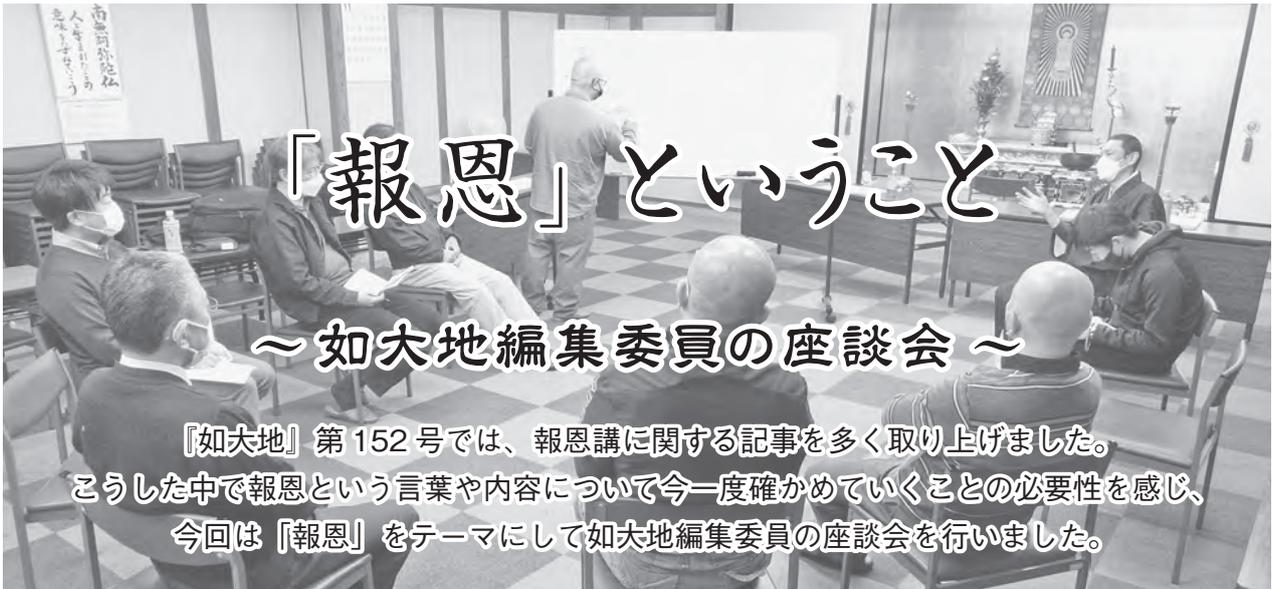
のに親は選べなかったということがあります。だから、ガチャを引いた者で、「アタリ」の親もいれば、「ハズレ」の親もいるということを表しているようです。

そのことを言い出した若者には、「俺は『アタリ』を引いたのではなく、うちの親は『ハズレ』だった。自分で選んでないのうちの親はなんだろう」という思いがあったのだと思います。赤ん坊の時は、ほとんど煩惱がありません。ということ、どんな家に生まれようが、男であろうが女であろうが、健康であろうが病気であろうが全部引き受けて生まれてきたのです。しかし煩惱がどんどん出てくるようになると、自分のものさしで都合のよいように考えるようになります。こんな親では、こんな身ではという不平不満が出てきます。しかしこんなところに生まれなくなかったという赤ん坊は一人もいません。全てを引き受けて生まれてきたはずなのに、いつのまにか煩惱に染められて、自分の人生をいただけなくなってしまうのです。「ハズレ」を引いたという心で生きていきます。本当は満足したいのだがそうではないということが、

「心の所念」としてはたらいっているのでしょうか。日頃、私たちは生活の中でも愚痴が出ます。その愚痴の奥深いところでは満足したいという願いがはたらいっています。だから、「なぜ、愚痴が出るのか」「なぜ『今』がいただけないのか」ということを、仏さまに教えられながら人生を歩まさせていただくのです。

だから、利益とは何かと言えば、念仏の救いです。念仏の救いというのは、どんな人生であろうと尊い人生を賜ったと、自分の人生を本当の意味においていただけたということです。しかし、私たちは凡夫という身を生きているので、そのような心はすぐ失せてしまいます。だから、「偽物の幸せ」を求めた愚痴ばかりの人生を超えてほしい。自分の人生を本当の意味でいただけてほしいと、仏さまから呼び掛けてくださっているのが、「南無阿弥陀仏」ということでしょう。

念仏申す機会を得て聞法しながら、そのことをひとつ、ひとつ確かめていくことに「念仏の利益」ということがあるのではないのでしょうか。



『如大地』第152号では、報恩講に関する記事を多く取り上げました。こうした中で報恩という言葉や内容について今一度確かめていくことの必要性を感じ、今回は「報恩」をテーマにして如大地編集委員の座談会を行いました。

**委員A** 真宗の仏事は報恩の仏事であるということを行っています。が、ご門徒さんから「恩に報いると言われても、恩が何のことなのか分からぬ」「報恩のためにはまず知恩から始めるべきではないか」と投げかけられたことがあります。

**委員B** 報恩講でいうところの恩であれば、それは親鸞聖人がお念仏の教えを広めてくださって、それが現代の私たちにまで届いていることに対しての恩でしょう。そのことを知らないといふのであれば、まずは日々の学びが必要だと思います。親鸞聖人を単なる歴史上の人物としてではなく、自分につながっている存在として出遇っていくことが大切だと思います。

**委員C** その話は仏事における恩が分からないということですが、そもそも普段の生活の中で自分が受けた恩を感じてその恩に報いたいと思っている人はどれだけののでしょうか。世の中便利になって、お金さえ払えば大抵のことは自分の思い通りになります。そうした生活の中で「ありがたい」という感覚がずいぶん鈍くなってきている印象があります。

**委員D** 「報恩感謝」という言葉があるように報

恩と感謝は切り離せないものです。報恩の前に感謝があつて、感謝が報恩へと向かわせるのでしよう。その感謝の気持ちがあれば私たちの中にあるかという問題ですよね。

**委員E** 報恩講の時期になって気付かされるのは、私たちが、知恩とか報恩感謝ということをやむを得ず取り立てて考え直さなければいけないような生活をしているということです。つまり平生は恩など忘れてしまっているわけです。忘恩です。毎年の時期が来たからということですよやく「何かしなければ。何か伝えなければ」と俄かなことをしているようでは「忘恩講」と言われても仕方ありません。

**委員F** 確かにそうですが、恩を忘れていたことに気付かされることも大切な恩だと思いますよ。恩を忘れていたとか感謝をしていないとか、なかなか自分で自分の姿を見つめ直すことはできません。真宗の仏事は自分自身が問われる大切な縁であり、恩はそういうところにもあるのではないのでしょうか。

**委員B** 私は、報恩講を単なる毎年のイベントにしないためには、やはり親鸞聖人のことをよく知る必要があると思っています。知らなければ

ば恩の感じようも報いようもないわけですから。それに、恩に報いるというのは、やらされてやるものではないと思うのです。だから日頃の聞法を大切にしていって、聞法を通して仏事に能動的に関わる姿勢を育てていきたいです。

**委員 G** 私もご門徒さんが主体的に関わるということはとても大切だと思います。報恩講の準備など一人でやった方が楽だと思うことも実際あるのですが、なるべく多くのことをご門徒さんと寺方で協力してするようにしています。そのような中で私自身が一人でできることの限界に気付かされることもありました。

**委員 F** やはりその場だけではなく、普段からのご門徒さんとの関わり方がものすごく大事ですよね。ご門徒さんへのお伝えの仕方に関して言うと、いきなり親鸞聖人とかお念仏の教えだとかの話をするところとつつきにくさを感じてしまつて門徒さんもいらつしやるので、私は自分の経験を自分の言葉で話すことから始めるようにしています。日常のいろいろな問題に対して「自分もこういう経験がありましたよ。そこでは、このようなことを学びました」と話すことが真宗の教えに関心をもつきっかけになつていると感じています。

**委員 C** そついった日々の積み重ねが、年忌法要や報恩講が報恩の仏事であるという認識の共有になつていくのでしょつ。

**委員 D** 報恩とは何かという問いに戻せば、私は引道をやっているのですが、先日引道の先生がお亡くなりになりました。そこであらためて先生のご恩に報いるということはどういうことかと考えた時に、それは先生に教えていただいたことを続けて、それができるようになることではないかと思いました。

**委員 A** 確かに報恩の現場とは仏事に限つたものではありませんよね。みなさんそれぞれの生活の中に報恩の現場というものがあつて、私の中に残つた感謝の気持ちから始まつていく心の動きや行動があるだろうと思います。

**委員 G** 私は先輩たちによくごちそうしていただいでいて、いつかそれを返さなくてはいけないと思うのですが、先輩からは「俺たちに返す必要はない。次の若い者におごつてやれ」と言われます。自分が受けた恩や教わつたことを次につなげていくことで、恩が「対一」で終わらな輪のように広がつていくということがあるのかなと思います。

**委員 F** 報は「報いる」とも読みますが、その他に、報道とか報告とか「伝える」という意味を持つ漢字でもあります。人それぞれ何を恩として感じるかは違つと思うのですが、私の場合だと、親がいる時はあまり親の恩というものを感じていなかったけれども、親がいないようになり、また自分が親になつて、「ああ、そつだつたんだ」と領けることがありました。恩を返す親はもういないですから、次は自分の子供に対してそれを伝えていこうと思つています。報恩というのはその人に恩を返すということだけではない、恩を次の世代に伝え送つていく「恩送り」という形もあると思います。

今回の座談会参加者は僧侶だけでしたが、「報恩」とは浄土真宗の根底に流れる精神であり、真宗門徒の生活の基盤となるものがあります。共に教えを聞き仏事を勤める者として、門徒と僧侶が一緒に確かめていくことが大切でしょう。平生の法話や感話をもとより、教団が作成したリーフレットをお渡ししたり、寺報で話題に取り上げたりすることも「報恩」について共に考えるよいきっかけになると思います。



富山教区  
 二〇二二年十一月二日  
**高山別院報恩講団体参拝**  
 会場 高山別院・飛騨 千光寺

このたび、高山別院報恩講に縁あつて参加しました。天気もよく、車で、国道四十一号線沿いの山々を越えていきました。道中では赤、黄、緑の日本の原風景を見、癒されて紅葉の秋を満喫しました。そうこうしているうちに高山別院に着きました。大きく立派で風雪にも耐えるような頑丈な造りに感心しました。観光の町、高山。多くの方が行きかう中、通りからでも別院に向かつて、手を合わせていかれる方の姿に信

仰心が篤い地だなど思いました。

さて、別院の起源は、鎌倉時代に白川郷に道場を立ち上げたのが始まりで「ごぼうさま」と呼び親しまれてきたとのこと。その後、幾度もの災難に遭いながらも再建されました。「おらがごぼうさまのために」と真宗門徒が一丸となり復興ができたのだと思います。すごい力で、北陸の私たちも信仰心は篤いけれど、この雪深い飛騨の地で脈々と受け継がれてきた信仰心に畏敬の念を感じずにはいられません。

私たちが別院に到着するやいなや「ようこそ、おいでくださいました」と笑顔で迎え入れてくださいました。報恩講を勤めるためには一年かけて、皆さんの準備等が必要です。駐車場でのすばやい対応、整理整頓、管理、清掃も行き届いておりゴミ一つありません。心からのおもてなしに頭が下がります。私たちもこういうおもてなしをしたいものです。

さらには、本堂に入って満堂でびっくりしました。ローソクの明かりに浮かび上がる阿弥陀さま、御影さまに自然と手が合わさりありがたいことです。「なんまんだぶつ、なんまんだぶつ」



厳肅につとめられるお経。お華も立派なもので、山から切り出した古木、苔、季節の花々が添えられてその土地ならではの生け方に感銘しました。

法話は三島清圓先生で、土地の言葉でありながらも分かりやすく、真宗の教えをかみくだいてお話くださりありがたかったです。私は今聞いたこともすぐ忘れ、また忘れを繰り返しながら聞いて生きています。

ただ、心残りなのは、高山で取れた野菜で作られる高山別院の「お齋」をコロナ対策の為にいただけなかったことです。

最後に飛驒の千光寺へ。高山から山へ山へと分け入って千メートルを超える高さのところにあることに驚きました。飛驒の豪族「両面宿禰」が古代信仰の祈りの場として開き、山全体が修行の場となっています。たくさんの方を見学し、山からのエネルギーや空気、森林の生命力を感じました。また、お寺の山の向かい側には御嶽山、日本の名山が手の届くところがありました。

「御嶽山が噴火した時、黒い煙がモクモクと上がりそれを鎮めるために、山に行ってお経をあげました」と住職の話が聞けました。

今日、一日私にとって身にしみる一日でした。

第十三組 明光寺 門徒 水島 良子

## 子ども報恩講

【二〇二二年十二月三日】

会場 富山東別院会館

私が報恩講に参加し体験してよかったことは二つあります。

一つ目は、松井さんのお話です。「ふたりのパンタカ」という紙芝居を聞かせていただきました。兄のマハー・パンタカは聡明であるのに対し、弟のチュツラ・パンタカは愚鈍な性質をしていました。チュツラ・パンタカは兄のようになりたくて弟子入りしても、やっぱり何もかも愚かでそんな自分が恥ずかしくてお釈迦さまに相談すると、「自分が苦手なことではなく得意なことをやるのだ。塵をはらえと唱えるのだ」とおっしゃいました。私はこのお話を聞いて、誰でも苦手なことぐらいあり、何も出来ないからと諦

めてはいけないと思いました。

二つ目は、土鈴づくりです。私は土鈴づくりをしてみてとてもよかったなと思いました。私は来年は兎年ということで兎の土鈴にしました。自分なりにかわいい兎の土鈴ができたのでうれしかったです。

私は今回の報恩講に参加して、二つのことを体験できてとてもよかったと思います。前よりもっと宗教について知れて本当にすばらしい体験をしたと感じています。

朝日町 廣田 有莉



おはなし



土鈴づくり

# 収骨奉仕団に参加して

【二〇二二年十二月二〜三日】

会場 真宗本廟同朋会館

二〇二二年十二月二日(金)午前十一時前に東本願寺御影堂門を潜ると聳え立つ本堂が目に入ってきた。ここに父の収骨がある。自然と合掌した。

東本願寺御影堂門が富山収骨奉仕団の集合場所だ。そこから東本願寺境内の宿泊施設に案内された。その建物は新しく清潔感のある「同朋会館」。寝食を共に法話や話し合い、奉仕活動を通じて「寺院生活」を体験するらしい。予備知識がなく、すべてが新鮮に映る始まりだった。十四年前の二〇〇八(平成二十)年十二月に東本願寺を訪れ父の収骨を行った。今回は、富山収骨奉仕団の一員として三兄弟が再び東本願寺に母の収骨を行うためにやってきた。

同朋会館の法話室がグループの学びの場となり最初に結成式が東講堂で行われた。見る・聞く・感じる体験の始まりである。お寺の食事は当初から期待はしていなかったが意外にもむしろ満足するメニューが続いた。新型コロナウイルス感染症対策も万全だった。マスクの着用が

徹底され各所に消毒液が配置されていた。

午後、母の収骨が本廟で行われた。これで両親が揃ったことで父も母も喜んでくれていると心から嬉しく思った。

翌日、午前六時五十分からの晨朝参拝はとても寒かった。本堂は広くて暖房設備もないため足元から冷えた。耐えた。朝食、諸殿拝観に続いて清掃奉仕が行われた。通常非公開の御影堂門上にハシゴのような急な階段を登ると釈迦三尊像が安置された場所があり、そこを奉仕団で清掃を行った。そこからの見晴らしは、天気も良く景色は見事だった。

二日間、各講義から印象深い言葉や住職の方々の語りや教えを受けほんの少し理解したように感じている。我が家系は祖先に対する尊敬を持ち続け月命日や回忌法要を怠ることなく現在も続けている。今回は、亡き両親が久しぶりに三兄弟(長男・次男が富山、三男が東京在住)を引き合わせてくれたことを、この二日間の教えから改めて認識することになった。

終わりに、両親が健在の頃から富山市水橋町の「玉永寺」さんには大変お世話になり今日に至っていることを謹んで感謝申し上げます。

東京都武蔵野市 河井 三二



# 慶讃法要に向けて

## 富山教区 宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百周年慶讃法要 お待ち受け大会

去る、十月五日、新川文化ホールにおいて富山教区宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百周年慶讃法要お待ち受け大会を開催いたしました。

当日は降雨の中、教区内住職、坊守、寺族、門徒、約三百二十名の方にご参加いただきました。



さて、現代人の苦しみは安心して人と人がともに生きていく人間関係が失われ、人々が不安と孤独に追い込まれているところにあるのではないのでしょうか。それは毎日の事件や事故、様々な社会問題となつて現れています。そしてまた、インターネットやAIの発達により、これまでの人間の営みがAIにとつて代わられようとしていることは、今あらためて「人間とは何か」ということが問われている大きな出来事なのではないでしょうか。

この「人間とは何か」について、私たちは日ごろ念仏の教えから学んでいます。このたびは宗門外から霊長類学者の山極壽一氏をお招きし、「なぜ、人は満たされないのか―現代社会にもとめられていること」の講題にてお話をいただきました。人間は他者とのコミュニケーションによって信頼関係を築き、他者への高い共感と連帯を特徴とする生物で、一人ではなく他者とともに幸せを感じるようになってきているのだというのです。これは、例えば真宗で教えられている「出遇い」―深いところで他者や自己と、

そして如来と出遇っていく―ということと、通ずるものがあるように感じられます。そうでありながら同時に、煩惱具足の身であるがゆえに互いに傷つけあつてしまう。私たちの間法生活にとつてもたくさん示唆をいただき、新たな視点となつたのではないのでしょうか。

また、宗務総長の挨拶（長峯参務代読）にもありました。宗祖の御誕生、そして立教開宗を慶び讃えるということは、念仏の教えに出遇い、自らにかけられた願いに深くうなずき、そのご恩に報いていく歩みに他なりません。このたびのお待ち受け大会も、その準備段階を含めてすべてがこの慶讃の営みであったことと拝察いたします。開催に向けてご尽力いただきました方々に感謝申し上げます。

ここに、本大会に参加された感想を寄稿いただきましたので紹介します。

\* \* \*

高名な山極先生の講演を聞ける機会を設けていただきありがとうございます。前半では、霊長類学の視点で見た人類史という私には未知の分野の内容であり、大変刺激を受けました。印象的だったのは、ゴリラと人間が登場した動画でした。ゴリラが何とかツァーガイドの人と対面しようと動き回る姿はとても微笑ましく感

動的でした。「人間同士の共感は、共食・共同保育・情報共有で高められる、そして人が言語を使用する以前は、音楽や踊りといった身体の共鳴で共感していた」ということは重要な説示でした。後半では、「現代社会の生産性向上は、人間の欲望を無限に拡大して、人間も地球もこのままだと滅んでしまう」という痛烈な警鐘が心に響きました。「これは科学技術だけでは解決はできない問題であり、文化と科学が共鳴しあう新たな環境倫理が必要である」という人類共通の課題を指摘していただきました。今回の講演では、人類史という視座が大変新鮮で、私にとつて宗教の意義を見直す上で貴重な示唆であったと思います。

第十組 蓮光寺 門徒 金尾 誠一

住職からお待ち受け大会に誘われたとき、チラシ一面のゴリラに興味を持ち参加しました。

京大前総長のお話は難しく理解できないのではと思いましたが、動物や人間の進化の話が面白く、時間の過ぎるのを忘れて聞き入りました。

特にゴリラとサルの違いは驚きです。ゴリラは出会ったとき、目と目を合わせ相手と話し合うこと、サルは出会った瞬時に力の上下に気付き頭を下げる話、人間もゴリラの様に話し合えば戦いも核も要らない世界になるのではと考え

ます。できないのが人間の欲と愚かさだと思います。

家の周りを見るとき、農業は機械の進歩で労働が本当に楽になり、また農薬で自然の草花、川の生物は絶滅状態です。他方その自然を回復する若者の姿をテレビで見ているとき、これも人間の知恵と思えば安堵しました。人間の欲望には切りがありません。戦後の暮らしを知る私は、今は夢のような毎日です。自然や周りの人たちに感謝するとき、手と手が合わさり頭が下がるのです。

第十組 福恩寺 門徒 古里 幸子

大会委員長ではあったが、講師に山極壽一氏を迎えることになって、一抹の不安を抱いていた。なぜお待ち受け大会に霊長類学者を招聘するのか？ということだ。実際、ポスターの表紙がゴリラであったことに違和感を持っていた方はけっこういらつしやうたようだ。しかし、その不安は杞憂に終わった。

山極氏は人間が人間である所以は「共感する力」であるとされた。共に食事をして、共に子育てをするのが人間の長所であり、コミュニケーション能力を高めるために人間は進化し、脳を巨大にしていった。言語を獲得したのはその後であり、産業革命、農業革命を経て、人間は今



や地球を破滅させるまでに肥大している。この地球の危機において山極氏が提唱するのは、人間が「共感する力」を取り戻し、所有していくのではなく、全てをシェアしていくことである。講題は「なぜ、人は満たされないのか」であったが、それは仏教の「執着をいかに離れるか」という課題と重なっていると思った。霊長類学と浄土真宗には意外と接点があった。私たちは「煩惱とは何か」「煩惱とどう付き合っていけばよいのか」という問いを常日頃課題としているが、それは未来の地球をどうしたら救えるのかという、重大な視座へとつながっていくのではないかと思った。

龍樹

「ことごとくよく有無の見を摧破せん」

『正信偈』

第十一組 王永寺 石川 正穂

## お寺紹介

## 莊巖山善覺寺

(富山市水橋池田町一七〇番地)



## お寺の歴史

莊巖山善覺寺の開基は、本願寺第八世蓮如上人(一四一五～一四九九年)に随従し、上人より法名「釋照蓮」を賜り、その後、現在の水橋二ツ屋に小庵をかまえたのがはじまりとされています。天文三年(一五四四年)、釋照蓮は本願寺第十世証如上人(一五一六～一五五四年)御裏書のご本尊(現在のご本尊)を賜り、善覺寺が寺院として誕生した年といわれています。また当時の池田郷の殿様の菩提寺として出発したという説もあります。

(善覺寺には現存する古文書資料がないため、宗教法人の届出書類や水橋町郷土史資料を参考に住職が調べられました)

## 「聞法講座」を開講

現在、善覺寺では聞法講座が行われています。お寺の行事に参加されるご門徒さんが年々減少し、このままではお寺の行事を

行うことができなくなるのではないかと、いう危機感により開講されました。

第一期目の講座は令和三年六月に始まり、期間は二週間にわたり合計八日間、一回二時間程度で開催。第一期目の講題は「親鸞聖人の教えを聴く」で内容は、

- ① 『正信偈』を唱和できるように稽古
- ② 住職より『正信偈』講話
- ③ 『書いて学ぶ 親鸞のことば 正信偈』

(東本願寺出版)を用いて書写

現在、第三期目まで開催され、毎回二十人弱のご門徒さんが参加されています。「新型コロナウイルスの影響で教区や組の聞法会、勉強会など中止になる中、仏教のほなしを聞きたい人はたくさんおられるのではないかと」と、住職は話されます。聞法講座の参加募集をしたところ思いのほかたくさんのご門徒さんが参加され、新たな可能性を見出しておられます。「今回参加された方々と協力しながらお寺の行事を勤めていきたい、やって良かった」と嬉しそうに話をしてくださいました。

(二〇二二年十一月二十七日 取材)

# 書籍紹介

編集委員がこれまで読んだ本の中で、心に残った本を紹介します。

## 子どもたちよ、ありがとう

平野 恵子 著 法蔵館 1,361円



私たちはさまざまな経験や知識を通して生きる智慧というものを身につけて、よいとか悪いとか、損だとか得だという、自分なりの「ものさし」を確立していきます。そのものさしは、社会生活を営む上でなかなか

手放し難いものですが、そういうものさしを持たずにはおれない、また持つことによって人を傷つけずにはおれない、そうした人間の愚かさ気付いていくことが大事なのでしょう。そうしたわが身の事実をあきらかにする世界、阿弥陀仏の世界に触れる時、私とまわりの人々の本当の出会いが始まることをこの本に教えていただきました。

(第12組 長安寺 庭田 龍信)

## なぜ人はカルトに惹かれるのか — 脱会支援の現場から

瓜生 崇 著 法蔵館 1,760円



絶対的な正しさ・正解を求める真面目な人たちに対して、教団は自分たちの「正しさ」を与えてくれる。それを与えられると人は本書の帯にあるように「これで、迷わず生きていけると思った」のだ。

しかしそれは教団の提供する「正しさへの依存」という目隠しに過ぎずその「正しさ」ゆえに、従わないものを容赦なく排除攻撃できてしまう。お互いが自分の「正しさ」を貫き通すのではなく、必要なのは自身を常に振り返り、考えながら生きること。そのときに生じたゆらぎ・ブレを認識し許容し合うこと。

「迷ってもいい」し、「迷っても生きていける」。

このことはカルト問題に限られたことではなく、我々の日常の問題でもある。

(第11組 専廣寺 蛭川 俊治)

## 教区だより

(敬称略)

### 教区役職者の改選

#### ① 教区会議長・副議長

(任期二〇二三年十二月二十四日～二〇二六年四月二十三日)

議長 石川 正穂 (第十一組 玉永寺)  
副議長 永崎 暁 (第十組 永宗寺)

#### ② 教区会参事会

(任期二〇二三年十二月二十四日～二〇二六年四月二十三日)

- |       |     |     |    |
|-------|-----|-----|----|
| 第九組   | 中堂寺 | 五十嵐 | 浄和 |
| 第十組   | 覺證寺 | 館   | 寿人 |
| 第十一組  | 光頭寺 | 種昂  | 宣弘 |
| 第十二組  | 常徳寺 | 北條  | 秀樹 |
| 第十三組  | 光照寺 | 藤條  | 法彰 |
| 同補充員一 |     |     |    |
| 第十三組  | 正覺寺 | 小塚  | 弘道 |
| 同補充員二 |     |     |    |
| 第九組   | 中堂寺 | 五十嵐 | 浄和 |

③組長

(任期：二〇二三年十二月一日～二〇二六年三月三十一日)

- 第九組 西光寺 源 大寿
- 第十組 覺證寺 館 寿人
- 第十一組 光顯寺 種 昂宣弘
- 第十二組 常德寺 北條 秀樹
- 第十三組 光照寺 藤 條法彰

住職就任

(二〇二三年七月一日～二〇二三年二月二十八日)

- 二〇二三年八月二十八日 第九組 圓龍寺 圓山 尚英
- 二〇二三年九月二十八日 第十組 傳長寺 月見 仁士
- 二〇二三年二月二十八日 第九組 禮行寺 広瀬 徹

教化日誌

(二〇二三年七月一日～二〇二三年二月二十八日)

7月

- 3日 富山別院公開講座「祖父江 佳乃氏」
- 14日 青少年教化小委員会
- 15日 解放運動推進協議会
- ご命日のつどい【長 真寿氏】
- 19日 あいあう会
- 20日 「如大地」編集会議
- 21日 教区会参事会・教区門徒会常任委員会合同会
- 22日 社会教化小委員会
- 26日 通常教区会・教区門徒会合同会
- 29日 あいあう会
- 29日 暁天講座【菊池 正見氏】
- 30日 暁天講座【落合 誓子氏】
- 31日 暁天講座【平野 明英氏】

8月

- 1日 戦死・戦災死者追弔法要兼申経法要（八一法要）
- 2日 正副組門徒会長協議会
- 2日 正副組長・組門徒会長会合同会
- 4日 秋安居事前学習会①
- 9日 秋安居事前学習会②
- 24日 秋安居事前学習会③
- 26日 教区同朋の会「総会」
- 26日 解放運動推進協議会

9月

- 9日 秋安居事前学習会④
- 13日 社会教化小委員会
- 14日 秋安居【東館 紹見氏】（～15日）
- 15日 ご命日のつどい【赤田 見心氏】
- 16日 解放運動推進協議会
- 21日 慶讃法要お持ち受け大会「実行委員会」
- 22日 富山別院彼岸会【安本 知子氏】
- 23日 富山別院彼岸会【高科 修氏】
- 24日 富山別院彼岸会【立島 秀哲氏】

10月

- 5日 慶讃法要お持ち受け大会【山極 壽一氏】
- 6日 富山別院報恩講【寺本 温氏】（～8日）
- 15日 ご命日のつどい【田中 直子氏】

④副組長

(任期：二〇二三年十二月一日～二〇二六年三月三十一日)

- 第九組 長光寺 長 守覚昭
- 永源寺 島 倉慶晃
- 第十組 聞成寺 桃 井量純
- 覺順寺 信 耀祐顯
- 第十一組 立尅寺 土 肥真人
- 善行寺 茂 利真由
- 第十二組 善念寺 岩 田一定
- 託法寺 華藏閣 行 文
- 第十三組 明光寺 野 田博俊
- 持專寺 大 伴修一

教師補任

(二〇二三年七月一日～二〇二三年二月二十八日)

- 二〇二三年七月二十六日 第十一組 立尅寺 土肥 朋子
- 第十一組 願行寺 長谷部 真誠
- 第十二組 明喜寺 篇原 信行
- 二〇二三年一月三十日 第十二組 榮明寺 佐賀枝 志恩

寺院解散

(二〇二三年十月一日～二〇二三年二月二十八日)

- 二〇二三年十一月一日 第十組 安正寺 清算終了登記完了
- 二〇二三年二月二十一日 第十二組 正圓寺 解散登記完了

⑤教区監事 (教区内住職より一名)

- 第十一組 浄誓寺 福井 修

11月

- 2日 富山教区「高山別院報恩講」団体参拝
- 8日 『如大地』編集会議
- 9日 社会教化小委員会
- 15日 ご命日のつどい【石川 慧氏】
- 17日 教区同朋の会「報恩講」
- 18日 あいあう会
- 27日 「ご満さん」【大窪 祐宣氏】
- 28日 「ご満さん」【豊島 信氏】
- 29日 解放運動推進協議会
- 30日 教学研修会【佐野 明弘氏】

12月

- 1日 『如大地』編集会議
- 2日 富山教区「収骨奉仕団」(3日)
- 5日 門徒研修小委員会
- 8日 「慶讃テーマ教化冊子」編集会議
- 13日 災害ハンドブック研修会
- 14日 部落問題講演会【黒川 みどり氏】
- 15日 『如大地』編集会議
- 15日 ご命日のつどい【見義 智証氏】
- 19日 「慶讃テーマ教化冊子」編集会議
- 20日 解放運動推進協議会
- 21日 社会教化小委員会
- 21日 あいあう会「公開講座」
- 31日 歳末勤行

2023年

1月

- 1日 初参り・初鐘の集い
- 15日 ご命日のつどい【北島 昭彦】
- 18日 「慶讃テーマ教化冊子」編集会議
- 26日 『如大地』編集会議

2月

- 6日 社会教化小委員会
- 7日 あいあう会
- 14日 寺院研修小委員会
- 15日 青少年小委員会
- 27日 解放運動推進協議会公開講座

【片山 寛隆氏】

敬 弔

ご生前のご功勞を偲び、謹んで哀悼の意を表します。  
(二〇二二年七月一日～二〇二三年二月二十八日)

《前住職・住職》

- 第十一組 専廣寺 住職 蛭川 正俊  
二〇二二年七月十七日 寂
- 第十組 長福寺 前住職 池田 周紹  
二〇二二年八月三日 寂
- 第十一組 専入寺 前住職 砂谷 昭夫  
二〇二二年十月十六日 寂
- 第十二組 淨永寺 前住職 長井 真隆  
二〇二二年十月十八日 寂
- 第九組 西圓寺 住職 白鳥 瑩心  
二〇二二年十一月二十七日 寂
- 第十一組 善覺寺 住職 脇坂 晴夫  
二〇二三年一月二十七日 寂

《前坊守・坊守》

- 第十一組 圓滿寺 前坊守 菊嶋 加壽子  
二〇二二年八月七日 寂
- 第十二組 長圓寺 前坊守 池原 規子  
二〇二二年八月二十二日 寂
- 第十三組 改観寺 前坊守 野田 以乃  
二〇二二年十二月十四日 寂
- 第十二組 照善寺 前坊守 轡田 華子  
二〇二二年十二月十五日 寂
- 第十一組 淨誓寺 前坊守 福井 禮子  
二〇二三年二月十四日 寂
- 第十二組 長樹寺 前坊守 前田 光子  
二〇二三年二月二十七日 寂

編集後記

法事の席の法話中にホワイトボードに板書した字を見ながらスマホを打ち込む若い世代の子がいた。会食の折に、「あの時は何を操作していたの?」と聞くと、私が法話時に話した単語を検索していたのを見せてきた。「検索すると難しい言葉しか出てこなかった」と言われたのであるほどと思った。「こんな難しいんじゃない僕たちは聞く気も起らないよ」と言われて更になるほどと思った。

生活における疑問もスマホやネットで素早く欲しい答えを得られるようになってきた。このようなことから、知人に「宗教とかはもうオワコンなんじゃない?」と言われた。オワコンとは「終わったコンテンツ」、つまり無用の長物という意味の造語である。役に立たないから有益なものとして出会うことがない、知るきっかけすら起らない。歳の近い知人だっただけにこれが現代の若い方々の思いの一端なのかもしれない。今回の紙面の法話録の中で書かれている自力、善人のお話がこの事をよく捉えている。都合の良い悪しきによって満足していくわが心を打ち破っていく言葉とはどんなものなのか。真実に出会って傾く心を信心(まことのこころ)としていった法話録の言葉がまた課題となる。

如大地の編集委員会の中で行われる座談会が面白い。個人的な見解なのだが寺族の面々が顔を合わせてテーマについて自身の現場や思い出を話し合うのが良い場だなど感じる。仏法を伝えていく私たち僧侶も迷いながら歩んでいるのだということを知る機会となつていく。都合を無視すると相手に届かない、しかし相手の都合に合わせて伝えることが捻じれていく。信頼関係があればこそ言葉があるが、なかなかその関係性になつていくのが難しい。思い通りの関係性を得られていないのは我々の中にもあるが、もっと何か出来るのではないか。座談会を通して自身の中にある言葉を吐露することで明らかになつていく心があることを知るの面白い。

第十三組 持専寺 大伴 慎介